鳩子

☆

海流篇

林 秀彦

検印廃止

鳩子1 海流篇

昭和四十九年七月二十五日　第一刷

著者　林　秀彦

発行者　浅沼　博

発行所　日本放送出版協会

郵便番号一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

印刷製本　大日本印刷株式会社

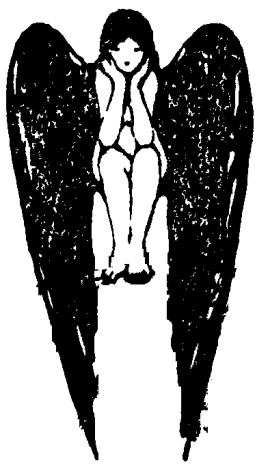
（落丁本・乱丁本はお取替えいたします）

造本制作　林事務所双樹社

© 1974 Hidehiko Hayashi

海流篇

鳩子



林 秀彦

日本放送出版協会

目次〈鳩子1海流篇〉

第一部　逃亡

第一章　夏の路　7
第二章　三人の兄弟　50
第三章　人兵　75
第四章　初音　100
第五章　その前夜　141

第二部　終戦

第一章　その朝　191
第二章　その昼　220
第三章　その夜　242
第四章　その翌日　268
第五章　希望　291

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　伊佐　周＋林　雄三

見返し装幀素材　昭文社〈最新分県地図山口県〉より転載

鳩子　海流篇

第一部 逃亡

第一章 夏の路

1

少女はそこにいた。

土手の下だ。

蟬の声が汗ばむ。輝く太陽が、その声と戦うように、今、中天にある。少女はうずくまっている。葉の色は生気がないくせに、強烈な夏の香りをむんむんと発散させる雑草が、彼女をしめつけている。

振り返ればあたりに人影はなく、青い稲田は彼方(かなた)のこんもりとした森まで続き、その先には小高い山が、木々の行手を押しつぶしていた。

時々、思い出したように風が、瑞瑞(みずみず)しい稲穂を撫でると、海のうねりに似た無音の震動が伝

わる。どこかで小鳥が、強く鳴く。
少女は泣いていた。
おかっぱの小さな頭が、小刻みにしゃくりあげる。
——人攫いにあったのだ
幼い頭脳が、それなりの判断力で、状況を摑みとろうと、必死になっていた。
——眠っている間にかつぎ出され、ここに捨てられたのだ。きっとそうだ……
それにしても、あまりにも多くの不思議があるように思えた。かつぎ出されるといっても、一体どこから——？　眠っている間といっても、一体いつの眠り——？
——そうだ、私はねぼけているんだ……まだ眠くて、はっきりものが考えられないのだ……。
少女は泣くのをやめた。
——そうよ、私って嘘泣きの名人よ！　いつだって、だましてやったわ……
だました……？　だましたって、誰を？
黒い一直線の眉の下の大きな瞳が、びっくりしたようにぱちぱちとまたたかれた。何ひとつ思い出すことが出来ない。すすけた顔に、困惑と軽い恐怖が浮かぶ。
そこで少女は、又ゆっくりと泣きだした。
さわやかな風が、何度か少女を慰めた。ゆるやかな時間が、涼し気に通りすぎた。泣き疲れ、少女は立ち上がった。長い間、人形のように抱きしめていた紺色の防空頭巾で、彼女は涙を拭った。垢が流れ落ち、頬の下から、思いのほか色白な肌が浮かび上がる。

少女は、土手を登り始めた。

ただその方向に身体が向いていたということが、出発の動機であり、その第一歩であった。

ずっと後になって、彼女はその時の自分の姿を鮮明に思い出すことが出来た。もしあの時、そう、失われていた記憶がふと甦った時、自分の顔が反対を向いていたなら、どうだったであろう……？ 稲田を背にしていたかわりに、土手を背にしていたら……。きっと自分は、ただ顔がそっちを向いていたというだけの同じ理由で、たんぼの中へと出発の第一歩を踏み出し始めただろう。すると自分は、土手の上の風景を見るかわりに、あの深々とした色の森の中へ入って行ったであろう。そしてその先の山を登り、それを越え、まるっきり別の風景へと踏みこんで行ったであろう。

そして今の自分ではなく、もう一つの別の人生を味わい、まったく違う運命に出遇い、もう一人の、ほかの人格を持つ女になっていたと考えても不思議はない。

そのことを思う時、彼女はいつもわくわくするのだ。三十年後の鳩子は、それをとても面白いことだと思うのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2

土手は、鉄路の為に築いたものであった。

少女は、何度かずり落ちそうになりながら、やっとの思いで這い上がるようにして攀じのぼった。立ち上がり、眼をこすった。

細い銀色の線が、陽炎の中をゆらめきながらどこまでも延びていた。枕木を埋めるのは、鉄粉をかぶった赤茶けた小石だった。少女は途方にくれ、しばらくその場に立ち尽した。

小さな意志が、彼女に歩けと命じた。どこかに行かなければならない。どこか人のいる場所。人間は一人では生きてゆけない。

二、三歩行き、少女はつま先の痛みに思わず声を上げた。片っぽの足には、赤い鼻緒の草履をはいていたが、もう一方の足は裸足だった。つま先から血がにじんでいて、親指の爪がはげかかっていた。少女の眼に、又涙が浮かんだ。

彼女は、木綿の灰色がかった無地の子供服を着ていた。それはすっかり垢と泥に汚れ、袖付けが鉤裂きになっていた。穿いているのは、藍色の地味な紬のモンペで、めずらしい銭形の模様が織りこまれていた。

足がなるべく痛まないように、少女は枕木の上を歩いた。ぴょいぴょいと飛ぶような格好に

なるのが、ふと自分でおかしくなり、立ちどまって、にやりと不敵に笑った。すると彼女は、さっきから邪魔になりながら腕に抱えていたものが、防空頭巾だということに初めて気がついた。

少女は、二本の紐と紐を結び合わせ、それを肩から斜めに下げた。下げてみると、その楽な格好が、習慣的なものであることを、ぼんやりと思い出すような気持になった。どこかで、誰かから、いつも、防空頭巾をそのように肩から下げるようにと教えられていたと思ったのである。しかし子供の意識は、それ以上の認識をたぐり寄せることは出来ない。ただもう一度泣きだしたい気持に見舞われただけだった。

泣こうか泣くまいか、迷うような甘ずっぱい感覚が、僅かな響きを感じとった。

少女は振り返った。

汽車は、牛の歩みより遅いように見えた。最初少女は、それが汽車であることさえ、なかなかわからなかった。何かゆったりと近づく怪物を見たような印象だった。

線路に伝わる地響の接近と、二度鳴らした汽笛の悲鳴が、少女を白昼夢から目覚めさせ、怪物の鱗のように見えたものが、機関車の屋根や汽罐の上に鈴なりにへばりついている人間であることに気がついた。

人々は、客車の窓という窓からあふれ、はみ出していた。長い屋根の上も、灰色の蠅のような人間がしがみついていた。中央に二輛つながった無蓋貨車も、詰めこまれた人々でふくれ上がっていた。

時々、走る列車から、人が地面に転げ落ちていた。
誰も叫ばなかった。汽車もとまらなかった。少女の目前を通過する時、一人の若い女が落ちた。女は、少女のすぐ脇の小石の上を二、三度転がり、危く土手の端でとまった。
衣類は焼け焦げ、僅かに身に纏っているといった感じだった。全身はひどい火傷で、水ぶくれになっていた。少女の眼にも、その女が死にかけていることはわかった。
女は、少女が恐る恐る近寄るのを視野の端に認めると、
「水……」
と言った。
その言葉で、少女は自分の喉もカラカラなのに気づいた。
列車の最後の車輛が、目の前を通り過ぎようとしていた。屋根の上に乗った人々の顔が、ぼんやり、少女と瀕死の女を見降ろしていた。
ガタンガタンと、ゆっくり線路を踏んで去ってゆく鉄車の音は、とてつもなく物悲しい音に聞こえ、不意に少女は置き去られる恐怖にとらわれた。
列車を追って走り出そうとした少女は、つんのめるような形で横転した。転げ落ちた女が、右手をのばし、少女のモンペの裾を、しっかりと握っているのだった。
「たすけて……」
かすれた声と、血走ったその眼が、少女の身を固くさせた。あわてるように、少女は首を横に振った。声は出そうになかった。

「そう……、無理ないね……」

とその女は低く呟き、手を放した。

走ればまだ列車に追いつきそうだった。追いつかなければ、この人と同じようになってしまう……、少女はそう思った。風が焼け焦げた女の黒髪を撫でるだけで、その人はもう動いていなかった。

少女は走りだした。

草履の片方だけ履いているのは走りにくいので、脱ぎ捨てた。するとはげかかっていた足の爪が石に当たり、その痛みに少女は思わず悲鳴をあげた。それと同時に、汽笛も悲鳴をあげるように鋭く響いた。

もう間に合わない——おいてきぼりにされるのだ——、絶望感が少女の胸に広がった。

ふと気づくと、汽車はとまっていた。

人々が、蝗のように地面に飛び降りていた。そのまま土手の下に転げ落ちる人もいた。停車した列車の下にもぐりこむ人も見えた。

何事が起きているのか、少女は呆気にとられ、理解出来ぬままその異様な光景をみつめた。

次の瞬間、耳を圧する轟音に、胃袋が足の下まで落ちてゆくような感じに見舞われた。

信じられぬほどの低空で、銀色に光る飛行機が、あっというまに少女の頭上を飛び越した。

翼が目を射るように、きらっと光り、星のマークが大きく見えた。

戦闘機は、列車と人々の頭上を後方から飛び越えると、彼方でぐっと機首をあげた。

一人の背の高い男が、線路の真中を少女に向かって走って来た。カーキ色のシャツに兵隊ズボンを穿き、無帽の毬栗坊主の男だった。

「なんしちょる！」

と、男は山口弁で叫ぶと、少女を軽々と抱き上げた。少女は無意識に、汗くさい身体にしがみついた。

土手を駈け降りる時、旋回した飛行機が、再び低空で列車の上を飛びながら、機銃掃射した。屋根に当った弾は金属音をたて、少女を抱いた男の足元にも、スポンスポンという音をたてた弾が、小さな土煙をあげさせた。少女は、小石から短い火花が散るのを見た。

男は少女を抱いたまま、稲田の中に、うつ伏せで飛びこんだ。男の体重に、少女はつぶされるような呻き声をあげた。

「すまん」

意外に落ちついた声が、少女に限りない安堵感を与えた。

爆音は去った。

稲の葉に埋もれた緑色の光の中に、突然の静寂が訪れ、平和な空に雲が浮かんでいた。男は呼吸をととのえようとしていた。そして、じっと自分をみつめている少女のつぶらな眼に出逢った。

男が笑ってみせると、少女もにっこりした。

「心配ない。もう大丈夫じゃ」

男は稲穂を押しひしぐように横たわったまま、起きようともせず、太い声で言った。
又、一陣の涼しい風が吹くと、あちこちで人々のざわめきが聞こえ、線路から飛び降りた人人は、今度は我先きにと、土手を登り、汽車へ戻ろうと、あわてていた。汽笛が短く、何度も鳴っていた。
どさっと音がして、男は稲田の中で寝返りを打つと、大の字にあおむけになった。
立ち上がって土手を見ていた少女は、その音に振り返った。
「綺麗な空じゃ……」と、男は呟くように言うと、今度は大きな声で「阿呆らし！」と怒鳴った。
「どうしたの？」
「なんがじゃ」
「やられたの？」
「やられてたまるか」
男は生真面目な表情で言った。
少女は嬉しくなって、にっこり笑った。
「よかった」
「ああ、よかった」
と、男はあお向けのまま頭で頷くと、胸のポケットから、くしゃくしゃになった煙草を一本取り出して、火をつけた。稲田から細い煙があがる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com